

成数はコントロール群よりも有意に低かった。Caspase 3 活性は両群とも、培養開始 4 週の nodule 形成部で検出された。従来、培養歯髄細胞の石灰化に伴ってアポトーシスが生じると考えていた。しかし、今回の結果から、石灰化にいたる以前の nodule 形成の時点からアポトーシスが生じていると考えられた。

演題 2. 加温処理によって培養メッケル軟骨細胞に誘導される細胞死の解析

○久保 宮幸, 石関 清人, 名和橙黄雄

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座

本研究において、われわれは培養軟骨細胞の加温処理によって誘導される細胞死が、アポトーシスカネクローシスによるものかをヒートショック（ストレス）タンパクの発現と BrdU-摂取細胞の免疫染色、TUNEL 法と光学および電子顕微鏡によって解析した。

細胞死は、40°C-60°C までの加温処理によって胎生 17 日の培養マウスメッケル軟骨細胞に誘導された。40°C-45°C までの準致死の温度では BrdU の取り込みが促進され、TUNEL 陽性細胞が高頻度に出現した。電子顕微鏡による観察では、アポトーシス様の細胞死は核クロマチンの濃縮、核分葉とアポトーシス小体の形成によって特徴づけられた。一方、50°C-60°C までの致死の温度による細胞死では、BrdU の摂取細胞と TUNEL 陽性細胞の減少が認められた。高温処理を施した細胞は、細胞小器官の膜構造の崩壊を伴っていた。ヒートショックタンパク 27 と 70 による免疫染色では、両者は低温度ではば一定の強さで局在していたが、高温になるにつれてその強さは現弱傾向を示した。

本研究による形態的解析から、準致死の温度による細胞死はアポトーシス様であったが、高温処理につれてネクローシスによる細胞死が誘導されることが示唆された。

演題 3. 間質に著しい好酸球浸潤のみられた舌扁平上皮癌の 1 例

○及川 優子, 武田 泰典, 佐藤 方信
八木 正篤*

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座
同口腔外科学第一講座*

悪性腫瘍の間質に好酸球浸潤をみることがあり、これが予後とある程度関連があると言われている。しかし、口腔領域原発の悪性腫瘍の動態と好酸球との関連についての記載は極めて乏しい。今回、我々は舌原発の扁平上皮癌の間質に好酸球の著しい浸潤をみた症例を経験したので、その組織所見を中心に報告した。

患者は 71 歳の女性で、舌左側縁の白濁と疼痛を主訴に口腔外科を受診。舌左側縁部には 5 × 7 mm の白斑がみられ、その周囲に軽度の硬結を触れた。白板症の臨床診断にて、生検が行われた。

生検材料の病理組織所見では、角化傾向の明瞭な扁平上皮癌が表層から筋層にわたって比較的小さな腫瘍胞巣を形成しながら浸潤していた。間質には種々の炎症性細胞とともに、エオジンに濃染する細顆粒状の胞体を有する好酸球が多数混在して認められた。

術前化学療法後に舌部分切除がなされ、原発部の腫瘍は完全に消失していた。

これまでの報告では、好酸球浸潤を伴う口腔癌は予後が悪い傾向にあり、好酸球は腫瘍増殖促進因子と考えられている。これに対し、食道や子宮頸部癌などでは比較的好後が良い傾向にあり、好酸球は腫瘍増殖抑制因子と考えられている。また、悪性腫瘍内に浸潤する好酸球数と血液中の好酸球数は、口腔癌では両者は相関しないと言われているが、他の臓器では相関すると報告されている。

今回報告した症例において、アレルギーの既往はなく、末梢血好酸球数も基準値内だった。このことは、口腔領域の腫瘍内の好酸球数と末梢血好酸球数との間に関連はないという過去の報告と一致した。しかし、好酸球浸潤を伴った口腔癌は易転移性で、症例の予後は悪いと言われているが、本症例では術前化学療法で腫瘍は完全に消失していた。今後、口腔領域の悪性腫瘍にともなう好酸球浸潤の意義について、さらなる検索が必要と思われた。